公立大学法人
静岡文化芸術大学

碧い風

SUAC
広報誌

Vol.17
2023 秋号

「走る」を超える
未来の車

教員×卒業生クロストーク／
SUACプロダクトデザインの系譜

// SUAC TOPICS //
二本松ゼミ編著『春野の民話』刊行
楽器博物館コラボ『おんせん♪プロジェクト』スタート
「オープンキャンパス2023」延べ4000人来場
海外協定校への留学・語学研修
第9回静岡国際オペラコンクール開催

Featured topic
教員研究紹介
UI/UXデザインが
価値観を変える
デザイン学部デザイン学科
宮地良治 准教授

碧い風 SUAC広報誌 特集

SUAC　プロダクトデザインの系譜

「走る」を超える未来の車

教員×卒業生 クロストーク

開学時より本学で継続して行っているプロダクトデザインの分野。
中でも公共性の高い移動機器デザインは時代の変化が現れる分野と言えるでしょう。
今回は、現役でカーデザインに携わっている本学卒業生と、
元カーデザイナーの服部守悦教授による、クルマ談義をお届けします。

カーデザイナーになるまで

竹内：僕は高校生の頃から車のスケッチをしていて、カーデザインを学びたくてこの大学を選びました。

服部：竹内君の学年は車好きが多かったよね。カーデザインサークルに所属するのは学年で2～3人だけど、7～8人いた。

小池：最近はみんなデジタルでスケッチを描くけど、竹内君は手描きが上手だよね。

服部：オープンキャンパスで竹内君の昔のスケッチを展示していたら、高校生が感動してたよ。

竹内：ちょっと照れますね。

小池：僕は、高校生の頃は理系の大学を目指していました。浪人中に考えが変わって、自分の好きな道に進もうと考えるようになりました。そこでたまたま静岡文化芸術大学が翌年開校することを知ったんです。

服部：運命的だね。浪人していなかったら入学していなかったんだ。

小池：はい、現役でどこか受かっていたら今この仕事はしていませんでした。昔から絵を描いたりものづくりが好きで、洋服がどうできているのか知りたくて、既製服の糸をほどいて型紙を作ってみたり。入学当初は服や靴などに興味がありました。周囲の影響もあり自然と車にベクトルが向いて、卒業する頃には車好きになっていました。

服部：期生のときは佐々木享先生だよね。先生はスズキの初代デザイン部長で、自動車業界ではデザイナー職で役員になった初めての人。当時は業界で話題になりました。

小池：はい、佐々木先生からカーデザインの経験談を聞いたり、実際のスケッチを見せていただいたりして勉強させてもらいました。

服部：僕の場合も竹内君と似ていて、子どもの頃から車が好きで、車の絵をよく描いていました。でも、昔だし愛知県の田舎だし、デザイナーなんて仕事は知らないわけです。高校生の頃進路に迷っていたら、美術の

次ページへ続く

碧い風 SUAC広報誌
2023年秋号

contents

P.01 Pick Up Student
P.02-04 ［特集］「走る」を超える未来の車 教員×卒業生クロストーク
P.05-06 卒業制作でみるSUACモビリティデザインの系譜
P.07-09 SUAC TOPICS
P.10 教員研究紹介vol.9　宮地良治 准教授
P.11 気になる、となりの授業紹介／SUACさ・ん・ぽ
P.12 キャリア支援室より
P.13 新任教員紹介
P.14 同窓会だより

pick up student

「映画製作から文化交流へ広がる関心をSUACで拓く」

タイ　シュウキ
戴 周杰さん

大学院 文化政策研究科2年
北京電影学院（中国）／東京藝術大学大学院出身

浜松に来て4年目。長期履修制度を利用して、普段は浜松市内の文化施設で働きながらSUAC大学院で学んでいます。18歳まで中国・湖南省で生まれ育った戴さん。大学は中国唯一の国立映画学校である北京電影学院に進学し、映画製作を実践的に学びました。2年次に履修した「日本映画監督研究」という授業で出会った木下惠介監督作品に感銘を受け、日本で映画を学ぶことを決意し、東京藝術大学大学院映像研究科へ。大学院在籍中は、製作作品が国内外のいくつかの映画祭に招待されることもありました。それまで映画製作に集中して取り組んできた戴さんは、映画祭をきっかけに、次第に映画製作から映画を通じて人々の繋がりを作る映画祭や映像文化イベントの企画に関心を移していきます。

◀戴さんが勤める「木下惠介記念館」。1930年（昭和5年）に中村與資平の設計により建設され、「浜松銀行協会」の施設として手形交換、会議の場、銀行家の交流の場として利用されました。1998年に国登録有形文化財。

木下惠介記念館
〒432-8025　静岡県浜松市中区栄町3番地の1
https://keisukemuseum.org/

東京藝術大学大学院修了後は同大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻に研究生として在籍し、キュレーションの基礎を学びました。同時に、東京都写真美術館インターンとして映像の展覧会や国際映像祭のアシスタントを務めます。その後、大きな影響を与えた木下監督の記念館（木下惠介記念館、浜松市）のスタッフとして働くことになった戴さんでしたが、上映会や講演会などのイベントや展示を企画し、施設を運営する中で感じたのは、アートマネジメントや文化政策分野に関する知識不足でした。それらを補うため、記念館の至近距離にあり、社会人院生の受け入れも積極的に行っているSUAC大学院に進学しました。

2022年で日中国交正常化から50年。時に政治経済の領域で緊張感が生じることもありますが、文化・芸術の分野では日中は様々な形で絶えず交流を続けてきました。映画という媒介を通じることで、国境や言語などの壁を越えてより一層深く交流することができる「映画祭」の研究を取り込んでいる「SUAC大学院生」の戴さんと、日本の文化施設にて日中文化交流の視点で様々な文化・芸術イベントを企画している中国人職員としての戴さん。

「今後も日本と中国の間に文化・芸術の架け橋のような役割を果たすため、自分らしく頑張っていきます」と語ってくれました。

先生が油絵を勉強している同級生がいることを教えてくれました。それがきっかけでその友人と話すようになって、身近に美大を目指している人がいることに刺激を受けましたね。それで自分もデザイナーになることを現実的に考えるようになったんです。先生と友人には感謝しています。

カーデザインの現場

—車をデザインしてから製品になるまでどのくらいの時間かかるのですか?

小池：企画が始まってから車が販売されるまで短くて4年、長いと5年くらいかかります。デザインの工程だけでも1年以上かかることも。

服部：デザインの工程が終わると完全に手が離れるわけではなくて、試作車ができ開発やテストをする過程や、工場で生産が始まる時にもデザイナーが確認に行きます。なので、できるまで何かしらずっと関わります。

小池：竹内君は入社4年目だけど、世に出た製品はある?

竹内：部品は来年、ある車種のあるグレードを買った人だけが見られます。

小池：自分が関わった車が走っているのを見ると感動するよ。楽しみだね。

—小池さんと竹内さんはそれぞれどのようなお仕事をされているのですか?

竹内：僕はエクステリアデザインといって、車の外装やスタイリングを考える仕事をしています。絵としては2Dですけど、頭の中では立体的に考えていて、横、斜め、前後など三種類くらいスケッチします。その車のコンセプトに合う使用シーンを描くことも。それを国内外のデザイナー達が描くので何百もの案の中からデザインが決まります。

小池：僕はそうしたスケッチを元に立体的なモデルを作る役割です。今はマネジメントの立場なので僕自身がモデルを作ることはないのですが、自分のグループの担当者が竹内君と話して、試行錯誤しながら形にしています。

服部：車のデザインはとても細分化されています。他にもインテリアデザインもありますし、ボディカラーやシートのファブリックを決めたりするCMF(カラー・マテリアル・フィニッシュ)もあります。車というと「移動機器デザイン」なのですが、様々な部品があるので「プロダクトデザイン」の要素もいっぱい詰まっているんですよ。

小池：インテリアは機能性を考えて頭を使いますし、エクステリアは直感が重要だったり、それぞれの分野で求められる性質も異なりますしね。必ずしも「車好き」だけの仕事ではないですね。

—服部先生のデザイナー時代、一番思い出に残っている車は?

服部：初代ハスラーはチーフデザイナーとして関わりました。ものすごい短期日程で作ったんです。通常はモデルを複数作って決めていくところを、初代ハスラーは一つしか作りませんでした。とにかく時間がなかったのですが、たまたま市場のニーズと合致したのかとても高い評価をいただき、思い出深いです。勢いでできた部分もあって、それが良かったのかもしれません。

小池：決断が早いのは大事ですよね。短期日程での不安はなかったんですか?

『楽しい』がきっとある

服部：日程の不安はありつつも、実は「これはイケる」という感じは早い段階でありました。エクステリアのスケッチが始まってすぐに、デザイナーがどんなものを描いているのか覗きに行ったら、ピンとくるデザインがあって、結果それが最終的な形になりました。自分が「推せる」「欲しい」形が出てきたので手ごたえがあったんですね。

小池：僕はハスラーには関わっていなかったのですが、怒涛の仕事ぶりは横目で見ていました。大変そうだけど、楽しそうに見えましたね。作り手が楽しんでいる仕事は、世の中の人に喜ばれる車になる気がします。

竹内：担当者がみんなノリノリだと空気もいいですし、チーム全体の士気も上がりますね。

小池：大変さより「楽しい」が重要だね。

竹内佑喜人 さん

スズキ株式会社
商品企画本部 四輪デザイン部／
2020年 デザイン学部
デザイン学科プロダクト領域 卒業

車は「みんなでお出掛け」派。コンパクトな車に大勢で賑やかに乗るのが好き。取材時は2シーター車で「ほぼ一人用じゃん」と周囲にツッコまれる愛されキャラだが、用途によってしっかり使い分ける合理派でもある。

カーデザインの未来

—昔と今、車に変化を感じる部分はありますか?

小池：例えば軽自動車を想像すると、30〜40年前とは比較にならないほど使いやすくなっているのではないでしょうか。同じ軽と呼んでいいのかというくらいの進化。

竹内：安全性も変わりましたよね。

服部：安全基準は年々進化しますからね。基準を満たすために必要な装置が増えれば車両のサイズを変えたり、造形で制約される部分ができます。近年は環境への配慮が増えて欧州は特に厳しく、それが車のサイズやデザインに影響します。制約によって車がサイズダウンすると、市場ではサイズなりの価格でないと買われなくなります。そこでメーカーは車高を上げて立派に見せたり、色んな付加価値をつけることで値段を上げようとする。それがSUVブームの始まりだったりします。そこに環境への要望がさらに上がったり、その間にコロナ禍になってキャンプブームが到来…と、様々な理由とタイミングが重なって車の流行もできていますよね。

竹内：EV車を災害時の電源として使用したり、「走る」以外の要素が増えたと思います。

服部：移動機器だけど移動しない使い方を「居場所としての車」と呼んでいます。今だと移動先や停車中にできることや車と共に過ごす体験の価値だったりしますが、この先自動運転の時代になってくると、移動する間に何ができるかを模索することになるでしょう。スマホの操作をするのか、会議をするのか、寝るのか、食事をするのか…とかね。

—これからどんな車を作ってみたいですか?

竹内：僕は、憧れる車よりも、普段の生活の中で欲しいと思える車を作りたいです。入社面接では「いい意味で、夢じゃない車を作りたい」と言いました。

小池：スズキ車はまさにそれだよね。手が届かない高級車ではなく、買いたいと思ったら、常識的な範囲で手が届く価格帯の車。竹内君が言うように「夢」というよりは実用性が高くて「欲しい」車だよね。

竹内：まさしく服部さんが手掛けたハスラーはそうですよね。今までありそうでなかった、直感的に欲しい車。きっと初代ワゴンRなんかもそんな感じだったのではないでしょうか。みんなが欲しかったカタチが実現した革命的な車だったのだろうと思います。その車の登場で街の景観まで変化するような。

小池：比較対象があると「あれより良い車」と勝ち負けのようになってしまうけど、今までにない車は「あれが欲しい」になるね。

竹内：そうやって指名される車を、服部さんのように楽しんで作りたいですね。未来にも「楽しい」はずっと変わらずに必要だと思います。

小池俊行 さん

スズキ株式会社
商品企画本部 四輪デザイン部／
2004年 デザイン学部
生産造形学科 卒業

車は「大事に磨く」派。うっとり眺めたり、風景の良い場所で撮影する一方、通勤用の車は汚れても気にせず、使い込むほどに出る味を楽しむ。二輪免許は持たないが、仕事で関わると興味がわいて好奇心が止まらない。

次世代モビリティには

服部守悦 教授

デザイン学部教授／
トランスポーテーションデザイン、
プロダクトデザイン

車は「道具」派。洗車はスタンドにおまかせ。自分では洗ったり磨いたりせず、車との関わりは一見クールだが、ミニカーや車グッズはつい集めてしまう。襟元は車のバッジで、クルマ愛と遊びゴコロは隠せない。

卒業制作でみるSUAC　モビリティデザインの系譜

2017

2016

2012

2007

2006

2004

2005

2023年 < 2021年 < 2016年 < 2015年 < 2014年 < 2012年 < 2010年 < 2009年 < 2008年 < 2004年 < 2003年 < 2002年 < 2001年 < 2000年 < 1997年

- トヨタ自動車がプリウスを発売（世界初の市販ハイブリッド専用車）

静岡文化芸術大学開学
デザイン学部生産造形学科

- チャイルドシート義務付け
- 東京都の環境規制に適合しないディーゼル自動車の指定地域運行禁止他自治体にも同様の動き広がる
- 慶應義塾大学の研究室を中心とした産学共同グループが電気自動車KAZを発表
- 全国の高速道路で電子料金収受システム（ETC）の一般利用始まる
- ホンダがアコード（7代目）に高速道路運転支援システム（HiDS）オプション設定
- トヨタ自動車、ホンダが日本初の燃料電池式市販車のリース販売を始める
- トヨタ自動車がハリアー（2代目）にプリクラッシュセーフティシステム（衝突被害軽減ブレーキ）をオプション設定
- ホンダがインスパイア（4代目）に衝突被害軽減ブレーキをオプション設定
- 運転中の携帯電話の使用に罰則
- 後部席に乗車する際のシートベルト着用が義務づけ
- 三菱自動車がi-MiEVを法人向けに発売（リチウムイオン二次電池を用いた車両としては世界初の市販電気自動車）
- 日産自動車がリーフ（初代）一般向けに発売（量産型電気自動車）
- トヨタ・プリウスPHV発売（外部の電源を利用して充電することができるプラグインハイブリッドカー）
- 大型トラックと大型バスで自動ブレーキの装着が義務化
- トヨタ自動車がMIRAI（初代）を発売（セダンとしては世界初の燃料電池自動車量販車）

デザイン学部3学科を1学科に再編、5つの領域を設定
デザイン学科プロダクト領域

- 2020年以降の温室効果ガス排出削減についてのパリ協定が採択
- 貸し切りバスにドライブレコーダーを設置することが義務化
- 日産自動車がセレナ（5代目）を発売し、プロパイロットをオプション設定（日本車としては初の自動運転車レベル2（部分自動運転）認定市販車）
- ホンダがレジェンド（5代目）にHonda SENSING Elite搭載車を追加（日本車としては初の自動運転車レベル3（条件付自動運転）認定市販車）
- 商用分野での脱炭素への取り組みを推進するための新会社 Commercial Japan Partnership Technologies（CJPT）が設立（いすゞ自動車・トヨタ自動車・スズキ、ダイハツ工業が参画）

2008

2009

2011

2010

2020

2022

2021

2023

SUAC TOPICS

TOPIC 01 国際文化学科二本松ゼミ（伝承文学）の学生が編著した書籍『春野の民話』が刊行

文化政策学部国際文化学科の二本松康宏ゼミ（伝承文学）では、浜松市北部の中山間地域で昔話や伝説を採録し、書籍として刊行する活動に取り組んでいます。2014年度の『水窪のむかしばなし』を最初に毎年刊行を続け、2022年度の『春野の民話』で9冊目になりました。新型コロナウイルス禍により調査規模の縮小やテーマの限定を余儀なくされてきましたが、2022年度は3年ぶりに自治会（集落）ごとの集団採録を再開。高齢者の皆さんには最寄りの公民館へお集まりいただき、和やかで活気ある雰囲気のなかでの採録調査を行いました。
「学術をもって地域に貢献する」を活動理念とする二本松ゼミでは、今後も地域と家庭に受け継がれた「民間口承文化財」を伝えていきます。

『春野の民話』
監修：二本松康宏　編著：奥 理咲子、島津華梨、中澤明音、永田絵美梨
発行：三弥井書店　発行日：2023年3月21日
定価：1,200円（税抜）　表紙画：川嶋結麻（本学国際文化学科卒業生）

TOPIC 02 SUAC×浜松市楽器博物館『おんせん♪プロジェクト（おんプロ）』がスタート

国内唯一の公立楽器博物館である浜松市楽器博物館。世界全域の楽器と楽器に関する資料を収集・保存し、調査・研究を行っています。
博物館学芸員資格養成課程を履修している学生たちと浜松市楽器博物館が連携し、大学生の若者目線で若い世代に向けた同館の魅力を発信するプロジェクトが始まりました。同館の全面的な協力により、普段は公開していない特別展や関連イベントの準備段階やリハーサルなどの舞台裏も取材し、SNSで発信します。「#おんプロ」を付けて投稿する浜松市楽器博物館SNSをチェックしてみてくださいね。

浜松市楽器博物館SNS

X（旧Twitter）　Instagram　Facebook　YouTube チャンネル

TOPIC 03 「オープンキャンパス2023」開催！

2019年以来4年ぶり、入場制限なしの「オープンキャンパス」を開催しました。
2日間の開催で延べ4,000人にご来場いただきました。学科説明をはじめとして模擬授業や研究室訪問、オープンゼミ、工房ツアーなど、SUACを体感していただけるプログラム。SUACを「見て・感じて・知って」もらえたイベントとなりました。

TOPIC 04 海外協定校への留学・語学研修

現在、SUACが協定を結んでいる海外の大学は19校・14か国（2022年3月時点）。留学が全面的に再開された昨年度から、多くの学生たちが留学や語学研修に挑戦しています。中には留学中の活動が評価され、現地の大学から表彰される学生も。それぞれが目標を持って充実した留学生活を送っています。
夏期休暇中には短期の文化体験や語学研修が実施され、比較的気軽に留学を体験するプログラムも用意されています。

留学近況レポートはこちら ▶

SUAC 公式サイト

Webサイトでも本学の教育・研究や
在学生・卒業生の活躍など、
トピックスをご紹介しています。
https://www.suac.ac.jp/topics/2023/

SUAC 公式X（旧Twitter）

公式X（旧Twitter）アカウントでは、
日々の学内での出来事や
イベントなどをご紹介しています。
@suac_official

Yoshiharu Miyachi

［研究分野］
インターフェイスデザイン
UI/UXデザイン

未知のユーザー体験が製品開発にもたらすもの

宮地 良治 准教授　デザイン学部 デザイン学科

□名古屋の端っこにある田舎で、ゆるゆると育つ

私の幼少期には『スーパーカーブーム』があり、子供たちは当たり前のように車に興味を持ち、車やバイクを扱ったＴＶ番組や雑誌がたくさんあったので、なんとなく自動車関係の仕事に憧れを持っていました。高校では部活動を行わず、男子校だったこともあって、友人とマイナーな女性アイドルのイベントに行ったりして過ごしていました。数学と物理が得意だったので、進路は工学部を中心に検討していたのですが、気がつくと『デザイン』を学ぶことができる九州芸術工科大学に進学していました。

□デザイナーとしての経験

大学では与えられた課題は何とかこなすも、ゼミの先生からしばしば『呼び出し』がかかるほど有意義に遊んでいました（笑）。厳しくて有名なゼミの先生は、課題の出来が悪い時は途中で腹を立てて帰ってしまうので、五十音順で一番最後の私まで発表が回ることは少なく、卒業まで一度も自分の名前を正しく呼んでもらえなかったのが思い出です。

就職した自動車部品メーカーのデンソーでは、計器メーターやカーナビ、携帯電話等のデザイン開発に携わりました。当時は仕事が深夜や朝方に及ぶこともありましたが、大学時代同様に遊びも一生懸命だったので、寝不足が大変な時期でもありました。この間、「量産部門」と「アドバンス部門」を行き来し、東京オフィスやトヨタデザインへの出向、アメリカへの長期出張も経験しました。

▲ アドバンス部門在籍時にデザインした自動車のスピードメーター

□UI※とUXへの興味

アドバンス部門では、20～30年後の未来を想定したデザイン開発を行います。例えば、2040年のＡＩとＶＲが浸透したユーザー価値観を研究し、社内開発部署や自動車メーカーに提案活動をしていました。

未知のターゲットユーザーに対してデザインアイデアを創出するためには、技術的・社会的・世界的な動向から推測して、エンドユーザーの価値軸を推定しコンセプトを決める必要があります。この作業を繰り返したことで、ＵＸというユーザーの価値観を定義するスキルが身についたと思います。

□研究者、教員の道へ

プロダクトデザイナーとして製品・サービスのデザイン開発に広く携わるのも楽しかったですが、気が付けばＵＩ・ＵＸデザイナーの肩書きも持つようになる中で「ＵＩデザインがサービス企画を起案する指標になるのでは？」との仮説を研究してみたいという思いが強くなっていました。それを実現する手段として大学の研究環境を求め、ＳＵＡＣへ。ＵＩ・ＵＸデザイナーにはマルチにデザイン活動をして、優れたクリエイティブとアウトプットを行う人が求められます。しっかりとした芯を持ったクリエイターを目指すため、学生の皆さんには幅広く学びながら、自身の経験も踏まえた面白さややりがいを伝えていきたいと思っています。

※UI（ユーザーインターフェース）はサービスや製品とユーザーを繋げる接点として、Ｗｅｂサイトやアプリなどのレイアウトやフォントデザインを行い、使いやすさや見やすさの観点で構築していきます。ＵＸ（ユーザーエクスペリエンス）は、製品やサービスなどの利用を通じてユーザーが得る体験のこと。商品を購入する前の、ユーザーのアプローチ（選ぶことや探すこと）段階から購入し使用した後までの、すべての工程がユーザー体験といえます。

Profile　名古屋市出身。九州芸術工科大学を卒業後、株式会社デンソーでデザインを担当。本学非常勤講師を経て2023年より現職。カーナビゲーション（2012）などグッドデザイン賞多数受賞。授業では「モノ・コト論」「インターフェイスデザインⅠ」などを担当 。

宮地先生が選ぶ一冊

「なぜみんなスターバックスに行きたがるのか？」

著：スコット・ベドベリ
訳：土屋京子

筆者は、7年にわたって「ナイキ」の広報部長を務め、世界ブランドに育て上げたあと、スターバックスのマーケティング担当役員に。その後スターバックスがどのように成長したか…、皆さんもご承知のとおりと思います。いかにしてブランド力を高められるか、UXデザインの視点からも興味深い一冊です。

メディアでも取り上げられています！

静岡県内、東海地区を中心とした新聞各紙、テレビなどでもSUACの取り組みが紹介されています

ここでもみられる！ SUAC TOPICS
大学Webサイト「新聞掲載情報」
https://www.suac.ac.jp/about/pr/newsletter/

一部の記事は閲覧できます

いよいよ開催！

第9回 静岡国際オペラコンクール

10月28日から11月5日まで、9日間にわたって開催される「第9回静岡国際オペラコンクール」。今回はアジア、ヨーロッパ、北米、南米、オーストラリアなど、世界33の国と地域から271名の応募があり、その後の予備審査等により選ばれた若手オペラ歌手60名が、コンクールに出場する予定です。出場者は、得意なアリアを歌唱する第１次予選、オペラ丸ごと１曲の中から前日に指定された部分を歌唱・演技する第２次予選を経て、東京交響楽団の迫力ある演奏による本選へと進みます。
静岡国際オペラコンクールは、これまでに多くの有能な歌手を輩出してきました。皆さんもぜひ、コンクール会場で、未来のスーパースターの誕生を見届けてください。

静岡国際オペラコンクール公式Webサイト
https://www.suac.ac.jp/opera/

▲ 第9回静岡国際オペラコンクールのポスター
制作：伊藤寛人さん（2021年度デザイン学部卒）

キャリア支援室より

Career Support Office

2022年度卒業生・20期生

就職状況報告

全体の就職率は96.3％となりました。コロナ禍による企業の採用抑制の影響も薄れ、最終的に2021年度とほぼ同じ数字となっています。
業種は、文化政策学部ではサービス（34％）製造（19％）小売（19％）金融（10％）が、デザイン学部ではサービス（48％）製造（24％）小売（14％）建設業（10％）が主な就職先となります。
職種は、文化政策学部では事務（41％）販売（31％）情報処理（10％）サービス職（7％）が、デザイン学部ではデザイン関連職（デザイナー、設計職等 53％）が中心となっています。
就職した主な地域は、静岡県36％、東京都30％、愛知県15％となっています。
2023年度卒業予定者の就職活動は、売り手市場の状況を反映し、2022年度と同様のペースで次第に結果を出しつつあるところです。キャリア支援室では、最新の動向を注視しながら、近隣大学や地元自治体等とも連携し、学生一人ひとりの志望や活動状況に合わせてのアドバイスや求人情報の提供等きめ細やかな支援を行っていきます。

2022年度卒業者:就職状況（2023年3月31日現在）　（人、％）

	卒業者	就職希望者	就職者	就職率
文化政策学部	207	179	174	97.2
デザイン学部	115	93	88	94.6
合　計	322	272	262	96.3

主な就職先

文化政策学部

（株）アダストリア、（株）一条工務店、遠鉄システムサービス（株）、大阪府教育委員会、（株）杏林堂薬局、（株）静岡銀行、（株）静岡新聞社、（株）静岡中島屋ホテルチェーン、静岡労働局、（株）清水銀行、スズキ（株）、（株）中日新聞社、日本交通（株）、野村不動産ソリューションズ（株）、（公財）浜松市文化振興財団、浜松市役所、（株）船井総合研究所、（株）プロス、ヤマハ発動機（株）、静岡大学大学院、静岡文化芸術大学大学院

デザイン学部

（株）池田建築設計事務所、オークラアクトシティホテルマネジメント（株）、（株）河合楽器製作所、（株）CygamesPictures、（株）サイバーエージェント、（株）ジイケイ設計、（有）春華堂、スズキ（株）、住友林業アーキテクノ（株）、（株）セイトウ、（株）セガ、中村建設（株）、（株）日産オートモーティブテクノロジー、野村不動産ソリューションズ（株）、（株）博展、三井デザインテック（株）、ヤマハ（株）、レンゴー（株）、愛知県立大学大学院、静岡文化芸術大学大学院

保護者会の実施

今年度の保護者会は、碧風祭に合わせた日程で対面での実施をします。就職活動の動向についての講演や学生生活についての説明、各業界で活躍中の本学OB・OGによるパネルディスカッションなどを予定しています。ぜひご参加ください。

日程
2023年11月4日（土）
午前：文化政策学部
午後：デザイン学部

会場
浜松市地域情報センター
（大学から徒歩5分程度）

※事前申込みが必要です。詳細は大学WEBサイトでご案内します。
※当日の様子は後日映像配信を予定しています。

インターンシップ・オープンカンパニー説明会

本学では、就職活動の準備として重要性を増しているインターンシップへの参加を促すために、主に3年生を対象として6月に説明会を実施しました（1,2年生も参加可能）。
本学学生の採用実績がある企業や、学生が興味を持っている企業を中心に28社に参加いただきました。学生が参加しやすいように、昼休みの時間を利用し、1社30分間の説明を1日2社まで、16日間かけて実施し、前年度の1.2倍にあたる延べ470人の学生が参加しました。短い時間ではありますが、説明後の質疑応答も積極的に行われ、学生の企業や業界に対する理解が深まりました。

気になる、となりの

授業紹介

文化政策学科専門科目

地域福祉論

担当
小林淑恵准教授

現場のリアルな声から理解を深める

文化政策は芸術・文化を対象とした公共政策を指しますが、関連する分野は幅広く、芸術学や音楽学、美学、哲学といった人文科学領域をはじめとして、経済学や社会学、法学、政治学、行政学などの社会科学領域も含めた学際的な学びが行われています。また実践の場での取り組みを糧として発展させていくのも文化政策の特徴の一つです。

「地域福祉論」では、地域福祉の実践的活動を知るため、現場で福祉に取り組む自治体や団体の方をお招きした講義を行っています。知的障がいの子どもを持つ親の会「浜松手をつなぐ育成会」の皆さんには、同会が行う委員会活動の一つである「浜松キャラバン隊（浜キャラ）」の活動をご紹介いただきました。

キャラバン隊は全国にある活動で、地域の学校や団体などを往訪し講演を行います。浜キャラでは、障がいのある人がどのように感じているのか、周囲の人たちの接し方などを分かりやすく体験的、かつ理解できるように寸劇を取り入れています。

浜キャラの皆さんの講義を通して、障がいのある人への具体的な対応方法を学ぶと共に、地域住民の連携による声かけなどのサポート、福祉教育のあり方についても考えることになった本講義。また、明文化されていない暗黙の一般常識を前提としたコミュニケーションについても、改めて見つめなおすきっかけとなりました。

Hamamatsu city　芸術の秋編

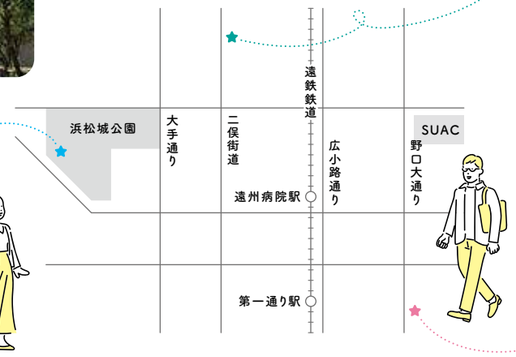
SUAC さ・ん・ぽ

浜松市内や大学近辺など学生が訪れる場所やお気に入りスポットをご紹介します。

「浜松市美術館」

最近のお気に入りの休日の過ごし方は浜松市美術館で鑑賞したあと、緑豊かな浜松城公園を散歩すること。都会のオアシスでリフレッシュできます。

文化政策学科 K.Aさん



「平野美術館」

授業の課題がきっかけで訪れた平野美術館。「街に開かれた美術館」というコンセプトにも魅かれて、通うようになりました。

芸術文化学科 Y.Sさん

「浜松市楽器博物館」

世界中の楽器が集まった楽器博物館は、何度行っても面白い!デザインを学ぶ私にとっても楽器の装飾をみていると勉強になります。

デザイン学科 T.Sさん

ご意見・ご感想をお寄せください

広報誌に関する**アンケートにご回答いただいた方の中から抽選で3名様**に大学ノベルティグッズを**プレゼント**します。

応募方法

2023年11月30日(木)までに、二次元コードより回答アンケートフォームにアクセスし、回答してください。

コチラからアクセス

※当選者の発表はプレゼントの発送をもってかえさせていただきます。

present / フェアトレードコットンバッグ

静岡文化芸術大学同窓会だより

「碧風祭2023」
同窓会イベント

2023年11月5日(日) 午後

今年度の碧風祭は、4年ぶりの制限のない開催です。同窓会では、久しぶりに同窓生の集う機会となるよう、同窓生と教員とのクロストークをお届けします。
卒業生の来場者には、来場記念品をご用意する予定です(詳細は、別途同窓生の皆様にご案内します)。

卒業記念品の贈呈

本学を卒業し同窓会員となる学生に、卒業記念品を贈呈しています。
卒業生の社会での活躍を祈念して、名刺入れを選定しました。

◀江戸時代から続く伝統織物「遠州綿紬(めんつむぎ)」を用いた大学ロゴ入り名刺入れ

＼同窓会の活動に参加してみたい卒業生を募集しています。日頃のご活躍もぜひお知らせください。／

コチラ ▶▶▶ 静岡文化芸術大学同窓会 E-mailアドレス：dousou@suac.ac.jp

静岡文化芸術大学基金
(教育研究支援・修学支援事業)
寄附者ご芳名

令和5年1月1日から
令和5年7月31日まで

ご寄附を頂戴した方々のご厚意に心から感謝を申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます。今後、学生が行う海外留学の支援等に充てさせていただきます。皆様には引き続きご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

寄附金額 894,000円 (内訳:教育研究支援660,000円、修学支援事業234,000円)

寄附者ご芳名
(五十音順、敬称略)【個人】

荒木伸哉　安西遥　石川統大　猪又友英　宇野博之　大川陽平　大塚晃司
大政洋　神戸俊光　岸田浩明　髙坂節三　齊藤純平　齋藤丈　鈴木花音
高橋克彦　高橋満　中里岳夫　西原幹人　藤川智子　藤田健司　松下育蔵
松本賢太郎　丸山奈菜　山下勝弘　山田智也

※ご芳名の掲載を希望されなかった方(21名)を除いて掲載しております

基金について

寄附者ご芳名
(五十音順、敬称略)【法人】

遠州信用金庫　遠鉄建設株式会社　株式会社公共設計　丸一物産株式会社

新任教員紹介　2023. NEW FACULTY

文化政策学部国際文化学科 准教授
文化人類学

内尾 太一

文化人類学を専門にしています。これまで多文化共生や災害復興の現場をフィールドワークしてきました。ここ浜松では、多様な外国人コミュニティとともにどのように将来の災害に備えていくかに関心を持っています。

文化政策学部文化政策学科 准教授
医療社会学 / 福祉社会論

野島 那津子

制度に包摂されない病者・障がい者の問題や、排除の社会的振り分けについて研究しています。本学では、「社会学」「社会理論」や社会調査系の授業を通して、理論と経験双方の魅力を学生に伝えていきたいと思います。

文化政策学部芸術文化学科 准教授
舞台芸術政策論 / 地域文化振興論

佐藤 良子

音楽や舞台芸術などの活動を持続可能にしていくための政策や地域社会との関係性を学生とともに探究し、文化芸術が豊かに息づく地域の未来を構想していきたいと思います。宜しくお願い致します。

文化政策学部芸術文化学科 講師
演劇学 / 日本現代演劇

稲山 玲

戦後の日本演劇について研究しています。演劇はコトバ、身体、美術、音楽、空間…と多様な要素から成り立つ芸術です。文芸大の皆さんと一緒に演劇を色々な角度から考えていきたいです。

デザイン学部デザイン学科 准教授
インターフェイスデザイン / UXデザイン / プロダクトデザイン

宮地 良治

UIUXデザインを、スマホやパソコンの画面グラフィックだけではなく、デジタルデバイスを介したサービスのインターフェイスとして研究を行い、その重要性と魅力を伝えていきたいと思っています。

デザイン学部デザイン学科 特任助手
近代建築史 / 建築意匠設計

西山 雄大

近代化過程における建築の複雑で多面的な展開の様相に興味があり、歴史研究と設計実務を並行させるかたちで活動しています。二つの視座を生かして、本学の教育の向上に貢献したいと思います。宜しくお願いします。

デザイン学部デザイン学科 特任助手
映像制作 / 3DCG

根木 隆之

専門は3DCG、映像です。映像制作には新しい知識や技術に対し興味を持ち続けることが不可欠です。機材やソフトウェアに関する幅広い選択肢を提示し、学生の皆さんのサポートをしていきたいです。

デザイン学部デザイン学科 特任助手
プロダクトデザイン

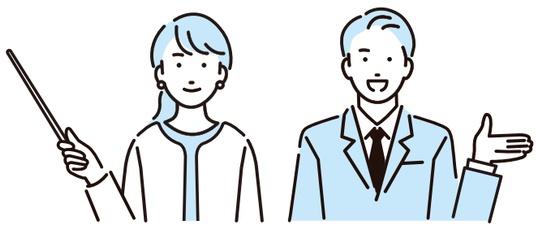
羽島 昂平

モックアップ担当の特任助手の羽島です。主に手作業で制作するモノづくりが得意です。モデルの造形や表面処理、仕上げの塗装、組み立てなど完成に至るまでの工程で、学生の皆様のサポートに努めます。

デザイン学部デザイン学科 特任助手
金属造形

横地 敬

本年4月より着任いたしました横地敬です。専門は金属加工で、工芸的な技法からCAD・CAMによる設計と機械加工を用いた作品・製品を手掛けてきました。金属をきっかけとして新たな造形を探りたいと思っています。



静岡文化芸術大学広報誌　碧い風 Vol.17　2023年10月1日発行　発行／公立大学法人静岡文化芸術大学
〒430-8533 静岡県浜松市中区中央2-1-1
TEL.053-457-6111（代表）　FAX.053-457-6123　https://www.suac.ac.jp/

SUAC'S OB
卒業生の活躍

PROFILE

企業組合 針谷建築事務所
理事 ／ 設計室長 ／ 一級建築士
鈴木（すずき）　隆文（たかふみ）さん

□ 2004年 デザイン学部生産造形学科 卒業

静岡県浜松市出身。2004年、デザイン部生産造形学科卒業。卒業後、イタリアに渡りミラノ工科大学デザイン学部に進学、修士課程修了後はイタリア国内で勤務する。帰国後はインテリア家具メーカーに勤めた後、建築士資格を取得。2012年、企業組合針谷建築事務所に入所。静岡県内の教育施設や公共施設、店舗などの設計に携わる。

家具デザインから建築の世界へ
すべての出会いと経験が自分の力に

浜松市に生まれ、育ちました。小学校の頃から真剣に陸上に取り組み、大会でも成績を残していたので、陸上の指導教員や教員だった祖父の薦めもあって陸上が盛んな磐田市の高校に進学しました。高校3年の11月まで大会に出場し、やっと大学進路を考えようと担任教員に相談したら、「（鈴木さんは）絵を描くのが得意だし、浜松市に新しく出来るSUACなら好きなことが出来るのでは。海外に行ってみるのもいいよ」というアドバイス（この言葉がその先、大きな影響を与えることになるのですが）。短い準備期間でしたが急いでデッサンを学び、デザイン学部生産造形学科（当時）に入学しました。

入学してから気づいたのは、周囲の人たちの技術の高さ。デッサンの授業で、同級生の作品に驚きました。自分の表現したいことを実現するためには技術が必要だと思い、仲山進作教授（当時）に相談。浜松市内の美術家の方をご紹介いただき、アトリエに通ってさらに学びを深めました。木彫にも取り組み、2年次の夏には岐阜の山奥に1か月滞在して大きな作品を制作したことも。学内では組立アトリエでひたすら自分の表現したい作品制作に打ち込んでいました。高校まで陸上で表現していた自分の気持ちを、どうやって作品に落とし込んでいけばいいのか、模索していたのだと思います。

一方で高校の担任教員に言われた「海外」というキーワードには「イタリアに行く」という目標を掲げ、文化政策学部の高田和文教授（当時）に相談して、在学中は密かにイタリア語を勉強。2年次にイタリアを初めて訪れたときには本場の芸術作品に圧倒され、帰国後は真面目に授業を受けるようになりましたね（笑）

4年間イタリア語を学び続けた甲斐があり、卒業時には問題なく話せるように。卒業後はイタリア・ミラノ工科大学に進学しました。イタリアでは文化的背景をふまえた、総合的な視野からデザインしていきます。所属した修士課程では家具や照明計画などを学び、修了後はイタリア国内で働きました。4年半在住したイタリアを離れ、静岡のインテリア家具メーカーで勤めていたとき、家具を設計する上でそれをしつらえる空間や建築のことも考えたいと一念発起。退職して専門学校に通い、建築士の資格を取得しました。

現在の職場に勤めて11年目。母校である高校の校舎新築設計を担当したことは、自分が経てきた道を振り返るきっかけとなりました。設計の際に大切にしているのはSUACでのデザイン基礎やイタリアで学んだ「背景を大切にする」ということ。地理的背景や歴史などを調べていくと、おのずと必要な条件や本質が見えてきます。自分の目指すべきものを定めてひたすらに“走って”きたこれまでのキャリアですが、いつも的確なアドバイスと励ましをくれる人たちとの出会いに恵まれていました。まだまだ広がっていく興味関心を、将来の建築設計にどのように活かしていこうかとわくわくしています。

岐阜の山奥で木彫に取り組む（大学2年）

母校の高等学校を設計

編集後記

今号の特集では、自動車業界で企画・デザインに携わる卒業生と本学デザイン学部教員との対談を行いました。大きな変革期にあると言われる自動車業界。ものづくりが盛んな浜松の特性を生かした企業や地域と連携した「SUACでの学び」が、次世代のモビリティ開発につながる可能性を感じました。

広報誌に対するご意見、ご感想をお待ちしています。第18号は2024年3月の発行予定です。